

Title	6.地震が十津川流域に及ぼす影響評価のために: 聞き取り調査の記録
Author(s)	諏訪, 浩; 藤田, 崇
Citation	1889年十津川崩壊災害の防災科学的総合研究 (2005)
Issue Date	2005-04-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/147974">http://hdl.handle.net/2433/147974</a>
Right	
Type	Article
Textversion	author

## 6. 地震が十津川流域に及ぼす影響評価のために

### —— 聞き取り調査の記録 ——

諏訪 浩・藤田 崇

明治 22 年の水害を始め、十津川流域の崩壊は主として大雨によって起きている。一方この地域は海溝型の地震や直下型の地震の揺れを繰り返し経験している地域でもある。特に注目されるのは 90 年ないし 150 年の間隔で繰り返すプレート境界型の巨大地震である。前回は 1944 年に東南海地震が、1946 年に南海地震が起きている。当時は十津川流域には地震計は設置されておらず、どのような揺れであったのかは正確にはわからない。そこで当時の揺れを体験された方々にお目にかかり、聞き取り調査をさせていただいた。快く調査に応じて下さった方々に深く感謝する。上野地にお住まいの松實豊繁氏には強力なお力添えをいただいた。松實氏は十津川村において長年教職に携わられ、退職後も引き続き十津川村教育委員をされている。松實氏に感謝の意を表したい。

以下に聞き取り調査 10 件の内容を記載する。1 番から 7 番までは 2003 年 11 月 17 日の調査に、8 番以降は 2004 年 8 月 7 日の調査によるものである。明治 22 年水災以降の主な地震として下記の①～⑥を提示し、それらを含めて、体験された地震関連情報などをお話いただいた。当地域に必ずしも定常的ににお住まいだったわけではないという条件の有無にかかわらず、どの方もこれらのうち特定の地震に限って記憶にとどめておられるという印象を受けた。余りにも長い時間が経過していることを考えれば当然のことかも知れない。地震の揺れの強さ、揺れの方向、家屋や斜面の被害の概要が聞き出せないものかと期待して調査にあたったが、結果は必ずしもそのような期待をよく満たすものではないかも知れない。しかし、特定の地震について記憶に残っていないということも重要な資料の一つと思われる。なお、調査報告の内容には個人的な情報も含まれているが、これらを削除すると地震災害の体験がどのような個人的な境遇あるいは社会情勢の中で生まれたものか、明確さを欠くと思われ、できるだけ忠実に再現するようにした。ご理解いただけると、ありがたい。なお聞き取り調査に際し、下記の地震資料を一枚の紙面にして提示した（国会資料編纂会、1998）。

①1899 年（明治 32 年）3 月 7 日、9 時 55 分 マグニチュード M 7.0、紀伊半島東南部、奈良県吉野郡と三重県南牟婁郡で被害が大。奈良県では北山筋で被害が大。震度は、十津川筋ではおおむね 4～5、北山筋で 5～6。

②1906 年（明治 39 年）5 月 5 日、8 時 9 分 M 6.2、紀伊中部、御坊や湯浅で壁に亀裂、田辺で壁落下、本宮で落石などの小被害

③1944 年（昭和 19 年）12 月 7 日、13 時 35 分、M 7.9、震源の深さ D 40 km、東南海地震、奈良県で死者 3、負傷 21、住宅の全壊 89 戸、半壊 177 戸など。十津川筋ではおおむね震度 5。

④1946 年（昭和 21 年）12 月 21 日、4 時 19 分、M 8.0、D 24 km、南海地震、奈良県

では負傷者 13, 住宅の全壊 37, 半壊 46 など。十津川筋の震度はおおむね 5。

⑤1948 年（昭和 23 年）5 月 15 日, 20 時 44 分, M 6.7, D 0 km, 田辺市付近が震源, 和歌山県と奈良県南部で小被害。西牟婁地方で被害が大きかった。死者 2, 負傷 33, 家屋の倒壊 60 など。和歌山の被害は死者 1, 負傷 18, 家屋の全壊 4, 半壊 33, 道路の崩壊 597, 橋の落下 2, 山崩れ 51 など。

⑥1950 年（昭和 25 年）5 月 26 日, 16 時 4 分, M 6.5, D 47 km, 熊野川下流, 木ノ本（現熊野市一矢ノ川峠－尾鷲に通ずる山道）の 10 箇所以上で山崩れ・落石による被害。畑の石垣崩壊（木ノ本）あり。墓石の転倒はなかった。

以下が聞き取り調査の内容である。

**6.1 大字七色の 亀本利一氏宅で、 亀本利一氏（大正 13 年生, 昭和 19 年に応召, 満州へ, 復員は昭和 20 年 10 月 20 日）、 亀本ミヨ子氏（大正 13 年生）。昭和 19 年に結婚。近所の井向氏に加わるが、話はほとんどが亀本利一氏による。**

昭和 19 年の地震について、ミヨ子氏： 家の 2 階にいたが、揺れが強い地震だったので田圃へ逃げた。みんな田圃へ逃げた。田圃が地震の被害を受けたようには記憶していない。建物にも被害はなかった。

昭和 21 年 12 月の地震について、利一氏： 地震のとき石楠辺（イシクスベ、蕨尾のそば）にいた。揺れは縦揺れだった。揺れがきびしゅうて逃げれなかった。この縦揺れのため唐臼の竿（横木）がはずれたほどだ。親父と筏を組んで十津川を下り始めたとき、水は赤く濁っていた。（上流で崩壊があったのだろう）。川の中には大きな石がいくつも落ちていた。強い揺れで大きな石が落ちたものと思われる。川下りのときにまた石が飛んでこないかと心配で、怖かったのをおぼえている。家のそばでは、裏の斜面が幅 30m ぐらい、高さ 30m ぐらいクエた（＝崩れた）。道の上と下が別々に同じようにクエた。そこは、石積み屋を頼んで直した。井向君の棚田のガマのほうで 2 m ぐらい下がった。以後現在まで段差がついたままだ。地震による被害は、田圃がクエたぐらいで、建物の被害はなかった。

昭和 23 年 5 月の地震について利一氏： 宵の口、あるいは晩に地震。田圃がクエた。長さ 40m ほどにわたってひび割れが走った。牛を使って田圃を耕していた頃だ。田植えの支度をしていた。

**6.2 大字桑畑（クワハタ）の岡氏宅で、岡 弘氏（昭和 4 年生）、岡 比古栄氏（ひこえ、昭和 6 年生）**

昭和 21 年の南海地震について、比古栄氏： 家の建物が 3 つ有り、一番下の家 B（道路脇で浦側（＝川側の意味））に泊まっていて、寝ていたときに地震にあった（図 1 参照）。地震は最初ドドド（縦揺れだろう）と揺れ、あとはギッチギッチ（横揺れだろう）と長い間揺れた。隣の寝間の道路側にタンスを二つ置いていたが二つとも倒れた。浦側に（＝東側へ）倒れた。そこには 3 人が寝ていたが揺れだしてすぐに飛び起きたので無事だった。

道路より山側の斜面上に、今住んでいる建物 A がある。当時はさらに山寄りやや北側に新しい建物 C が完成した直後だったが、建物 C の周りの石垣が全部崩れた。建物 C の母屋は崩れなかったが、便所や台所が傷んだのと、山が石原なので落石があつて危ないということで新しい建物 C に住むのはやめて、仮設の家屋に移った。

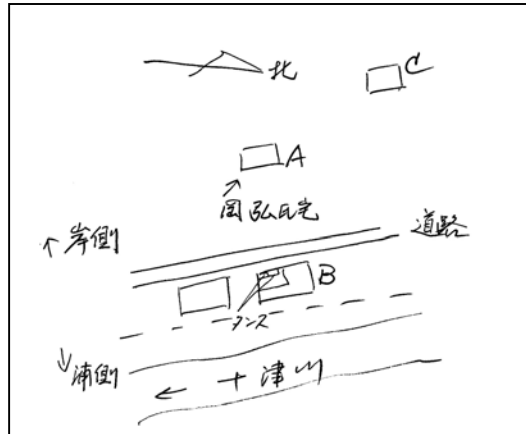


図1 桑畑の岡 弘氏宅付近建物配置図

**弘氏と比古栄氏：** 桑畑小井に小学校があつたが、この地震で石垣が崩れてトンデしもうた。地震の後、2箇所仮設の小学校が作られた。そのうちの 하나가岡氏の現在の宅地付近に設けられた。桑畑小学校は戦中戦後を通じて、先生が二人で、校長先生が1, 2, 5, 6年生を、女の先生が3年と4年生を担当するという体制だった。生徒は50人ほどだった。

**弘氏：** 昭和21年の地震のとき、山の仕事で和歌山県熊野川町の西敷屋へ行っていた。西敷屋の集落から小井谷を1時間ほど上がったところに小屋があり、そこに居た。地震で茶碗が落ちたりしたが、暗かったのでまた寝た。夜が明けて昼頃に親父が小屋までやってきて、地震で大変なことになるから連れ帰ろうということになった。道がクエて無くなっているところもあり、そういうところでは一旦山に上がって迂回したりして、難儀して戻った。日暮れまでには戻ったと思う。(川を渡るときに川は濁っていたかとの間に、“濁っていたかどうか覚えていないとのことだった。亀本利一氏によると、七色の辺りでは赤く濁っていたとのことだったが、川を渡った桐畑の辺りでは、そのときは濁りはなかったのかもしれないと、岡 弘氏は言う。)

**弘氏と比古栄氏：** 桑畑ではけが人は出なかった。家屋はつぶれなかったが石垣はクエた。棚田の石垣がごとく崩れたので、棚田の田圃は2/3が使えなくなった。当時の家屋は杉皮葺きで、それに大きな石を載せて強風に耐えるようにしていたが、その屋根の石がたくさん落ちた。桑畑の家屋に全壊したものはない。(この地震で十津川村では全壊13戸、半壊116戸を数えたという(十津川村, 2001)。松實豊繁氏の話では、壊れたのは2階建ての建物だろう。桑畑の家屋は平屋だった。それもあつて倒壊を免れたのではないかと、とのことである)。しかし一時は桑畑の集落をどこか別の所へ移してはと相談をしていた。果無(はてなし)の方へという話もあつたが、いつのまにか話は立ち消えになった。

(地震で石が動いたりしたかとの間に、) 地震で石は動いた。山の斜面に亀裂がいっぱい

入った。亀裂を調べに行ったこともある。比較的最近では、10 年以上前だが、石止めの工事が行われた。県と村でやったのだろう（写真 1 参照）。明治の崩壊の後で、まだクエてくるので対策工事がしてあるところもある。こちらのほうは営林署による工事だろう。（地震の頃の桑畑の人口は？との間に、屋号を挙げて人の名前を並べて、）全部で 10 軒で、50 人ほどだった。当時は一軒当たり 5 人ぐらいだったことになるが、今は一軒当たり一人か二人だ。



写真 1 矢印で石止めの構造物を示す

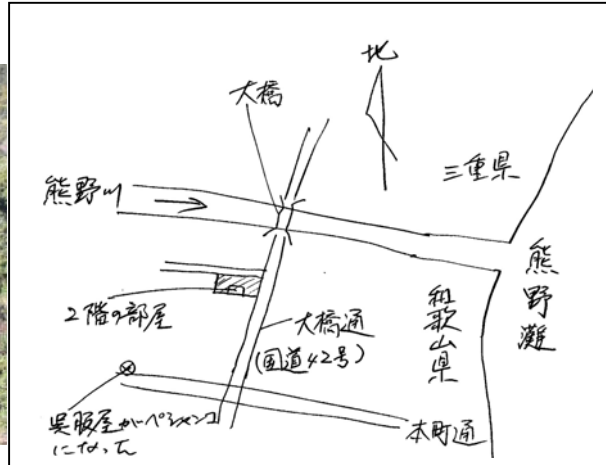


図 2 出口 登氏の叔父の家配置図

6.3 大字平谷の 出口 登氏（大正 14 年生）と出口八千子氏（やちこ、昭和 2 年生）。昭和 25 年に結婚。

登氏： 終戦の年に復員して翌年、昭和 21 年の南海地震のとき新宮の叔父の家の 2 階で寝ていた。タンスの取っ手がカタン・コトン・カタン・コトンというのでタンスが倒れてくるのではないかとと思ってタンスを押さえていた。前隣が荒物屋でそこから助けてくれという声をした。旦那さんが不在で奥さんと子供さんだけだった。叔父の家の戸は開かなかったが、なんとか飛び出した。荒物屋の戸も開かなかったが、何とかこじ開けて助け出した。叔父の家は熊野川の南側で、大橋通の東側、大橋通に面していて、しかも川に沿うように細長く建っていた（図 2 参照）。タンスは 2 階の部屋の川に面するような位置に立っていた。それが前後に揺れて取っ手が前後に揺れていたのだと思う。押さえてもカタンコトンと揺れ続けた。（後で調べると、大橋通りはほぼ南北方向。タンスは結局南北方向に揺れていたことになる） 新宮はこの地震で丸焼けになった。大橋通を曲がって五新通り（ゴシン）のほうへ出て十津川へ向かう途中で切目屋薬局（きりめんや）というのがあるところから火の手が上がったそうだ。地震で薬品が落ちて火が出たと聞いた。切目屋薬局は今は駅のほうに移転している。家が倒れて道を塞いだりしていたので、新宮の消防は動けなかった。三重県側の消防が来たかも知れん。幾筋も道があったので延焼は免れるかと思ったが、途中で風向きが変わって川のほうへ火の手が飛んで新宮は大半が焼けてしまった。のっぴらになったので、どこがどこか判らんようになってしまった。火災が鎮火した後、黒山の人ばかりがしているところに行き当たったら、そこは配給用の缶詰の山が焼けたと

ころで、その缶詰を持ってけ持ってけと皆で缶詰をもらったのを憶えている。（何の缶詰だったか、との間に、）魚の缶詰だった。駅のほうにもう一軒親戚があった。駅のほうは焼けなんだ。親戚のうちも焼けなんだので、そこへ移って後片付けを手伝っていた。新宮の親戚のうちの手伝いに行っていて震災にあったことになる。消防はまだきちんとした組織として出来ていなかったかもしれない。あったとしても消防も被害に遭っていただろう。（墓石が倒れたかどうか、との間に、）墓へは行かなんだので、倒れたかどうか判らない。電柱は倒れていて道は通りにくかった。当時の電柱は木で出来ていた。十津川へ戻ったのは年が明けてからだったと思う。プロペラ船で戻った。

八千子氏：昭和 23 年の田辺の地震のときは駅前の近くの湊海蔵寺町にいた。風呂屋の煙突が倒れたりしたのを憶えている。



写真 2 佐田太一氏の庭先から十津川方面を見下ろす。矢印でレストランを指し示す

#### 6.4 大字谷瀬の 佐田太一氏（昭和 6 年生）

昭和 19 年の東南海地震のときのことはおぼえている。少年航空兵に志願して一次試験に合格して、つぎ二次試験を受けるため、19 日に谷瀬を出発して山口県の大竹まで行った。1 週間ほど向こうにいて戻ってきた。当時バスは五條と風屋の辺りの間を結んでいた。しかし、往きは道がこわれていてバスは止まっていたので、歩いて行った。山は地肌がむきでた状態のところが目についた。特に大きく崩れていたのは濁谷の辺りだった。濁谷というのは谷瀬から 4 km ほど北へ行ったところだ。今工事をやっている。上から石が落ちてきても石が川へ落ちるようにしてあるところだ（ロックシェッドのこと）。1 週間ほど向こうにおって戻ってきたときには道路上にあった土砂がのけられていて、バスは風屋まで行くようになっていて、バスに乗れた。大鉢山手前側斜面の道路脇で、今は中島氏がやっているレストランがある辺りの斜面が崩れていた（写真 2 参照）。大鉢山の右手奥の方の高時山のほうも崩れていた。

（地震のときの揺れはどうだったかとの間に対して、）学校へ行っていた。勉強していたのではなく、山へ炭焼きのための木を切りに入っていたのだと思う。地震で家屋に被害が出たようには記憶していない。山の斜面の石はまくれていた。（庭先に出て、十津川のほうを見下ろしながら、）今ここから見えるレストランの背後の斜面はハゲ山のようになっている。



た。この地震の関連でいくと、兄貴が地震の前に川のほうでオーロラが出たのを見たと言っていた。そんなことはあるだろうか。どれくらい前か知らないが、とにかく地震の前だ。

いっぽう、地震の時の話ではないが、明治22年の災害のときは、ここらあたりから見ると、あのレストランあたりに水が見えていたそう。山崩れで新湖ができて水位が上がったので見えたのだ。今は川はここからは見えない（写真2参照）。私のところは江戸中期からここに住んでいる。納屋にいろいろ古い道具類が残されている。これは唐臼（写真3）で、こちらの大きな円形の板のようなものは唐箕。脱穀のとき重いのと軽いのを分けるのに使っていた。縦板のここに天保十何年との文字が残っている。今は使っていない。



**写真3 唐臼（左の写真）と唐箕（右の写真）。** 松實氏が指し示す部分が唐臼の竿の支点。亀本氏の話にあったように、もしもこの竿がはずれるとすれば、地震の縦揺れで10cm 余り跳ね上がらなくてはならない。

## 6.5 大字谷瀬の 森脇光夫氏（大正13年生）

明治22年の水害は和歌山県もひどかったと聞いている。

昭和19年の東南海地震はわしらも経験している。上野地の昔の小学校が増築中にこの地震があった。ちょうどその増築の仕事に出ていた。石垣の上に校舎が乗っていて横揺れ。おおむね南北方向に揺れた。石垣の上の柱が15cm ぐらいずれるように揺れた。揺れはやや長く続いた。その校舎は今はない。その上の校舎は今も残っている。周りに地割れはなかった。当時は、大字林の丸瀬（まるぜ）に住んでいた。国道とは反対側だ。周りは田圃だけだった。カーブのところに旅館があった。あそこは中畑という家で、息子は俺の一級上だった。昭和10年か11年頃に旅館は火事で焼けた。今もその建物の残骸の一部が残っている。地震のあった日は夕方まで仕事を続けた。丸瀬までの帰り道は特に問題はなかった。歩くのに不都合はなかった。ただ、山の土が垂れとった（崩れていたの意）。道路上に多少の土砂は落ちてたが歩くのに支障はなかった。あの当時、バスは一日に2往復ぐらいあったが、バスは高かったので使わなかった。みんな歩いていた。バスが止まったとかはあまり記憶にない。

私は十津川村へ来て 70 年近くになる。その前は田辺の近くにいた。和歌山県の大塔村だ。小学校の 1 年生のときは三重県にいた。2 年から 4 年生までは十津川村において、その後大塔村へ移り、6 年で卒業して 13 才で丁稚奉公に出た。三歳の時両親が離婚した。4 人の子供は母親についていったが、母の再婚とともに子供はじいさんのところに預けられたりしてばらばらになった。連れの息子は私より 4 つ年下で、その子の子守をしながら小学校へ行った。それが十津川村の小学校の 2 年から 4 年になるまでの期間だ。その後大塔へ飛び出た。結局母親とは生まれてから十年間しか一緒にいなかったことになる。今も当時のことをはっきり思い出す。三重県にいたときには水害にあった。北牟婁郡相賀町（アイガ）の木津（コツ）という所にいた。昭和 6 年から 7 年にかけての 1 年だけそこにいた。相賀町立便ノ山小学校（ビンノヤマ）にいた。1 年生から 4 年生までが一つの教室だった。そのとき相賀町で水害があつて 24 名が生き埋めになった。私の育ての親が大八車にその死体を乗せてお寺まで運んで供養したのをおぼえている。小学校はその寺の直ぐそばだった。室戸台風は昭和 9 年やったと思うので、この水害はその前やったと思う。

（注 1. 室戸台風は確かに昭和 9 年 9 月 21 日に大阪を中心として近畿地方に大きな災害を引き起こしている； 注 2. 森脇氏は相香町（オオカ）と仰ったが、正しくは相賀町（アイガ）であることがわかった。相賀町には便ノ山地区があり、そこに相賀町尋常高等小学校の便ノ山分校があつた。相賀町は昭和 28 年に引本町（ヒキモト）、船津村、桂城村（カツラギ）と合併して海山町（ミヤマ）となっている）

昭和 19 年の地震のときの話に戻ると、家は壊れなかった。家というても山小屋だった。母親が再婚してから 3 年間は山小屋生活だった。生木を組んで造った家だった。だから地震でこわれるようなものではなかった。

わしの昔の住民票がある。これです。名前は小門光夫（こかど）という。母方の姓です。わしは戦時中、広島原爆の残務整理・片付けに行った。落ちて 3 日目に行った。8 月 9 日の 1 日だけ、広島で作業にあたつた。その後結婚して息子を 3 人もうけたが、三人とも原爆症で亡くした。わしも肝臓をやられた。長男は肉腫癌で、次男は未熟児で出てきて死んだ。三男は脳腫瘍で死んだ。わしの履歴書は横須賀のものなので原爆症の認定はしてもらえなかった。呉の軍履歴書をもろた連中は容易に認定してもらえて、医療費はかからなかった。それも問題やった。最初沼津の工作学校で新兵教育を受けて、7 月末に岡山へ向けて軍用列車で出発したが、出発して直ぐに機銃掃射のような爆撃を受けた。富士駅で休憩した。名古屋へ着いた。そこでも空襲にあった。列車から 50 人ずつ降ろしていった。名古屋でも降ろしたと思う。岡山で 50 人わしら、広島駅で 50 人、そして岩国で 50 人降ろしたそう。広島では「よう、元気でやれよ」と言うて別れた。（注。森脇氏らは一旦広島まで行って、又岡山へ戻ったとのこと）。その後間もなく広島に原爆が投下されて、広島で別れた連中が巻き込まれたことを当日の昼には知った。原爆投下後の後片付けで 8 月 9 日に広島へ行った。岡山へ着いたのは原爆投下の 9 日前だった。岡山の倉敷で木製の飛行機を作っていた。横はベニヤで、胴体は木曽の桧、金属はエンジン周りだけだった。

終戦の後、昭和 20 年の 9 月 27 日に復員になった。大阪で 2 日滞在して、弟の家にいた。



弟は先に復員していた。鶴橋から歩いて道頓堀へ出た。角座が半分残っているだけで、あとは全部焼けてなくなっていた。難波の駅前蔵が7つ焼けずに残っていた。難波駅では築港が丸見えやった。大阪駅の百貨店なんかは浮浪者の寝間になっていた。パンツしかはいとらへんかった。五條に戻ってきた。昭和23年には長男が生まれた。昭和23年とか25年の地震はおぼえていない。

#### 6.6 大字上野地の 山中勝喜（かつき）氏（昭和5年生）

昭和19年の地震はおぼえているが、21年の地震はおぼえていない。昭和19年には私は14才で中学生だった。上野地の学校は川側に明治時代にできた古い校舎があり、山側に新しい校舎があった。新しい校舎は昭和40年頃まで使っていた。二つの校舎の間を幅が2mほどの渡り廊下でつないであった。渡り廊下付近には刈ってきた茅が積んであったが地震が来るや、みんな茅を飛び越えて新しい校舎のほうへ逃げたのをおぼえている。

当時は炭焼きばかりしていた。炭俵を作るために茅を刈ってきていた。茅を編んで円筒を作り、ふたは板で作ったようなもの。長さは70cmか80cmぐらい。地震で新しい校舎のほうへ逃げるときかその後か、旧校舎のそばの石垣が地震でつぶれたのを見た。石垣の高さは4mぐらい。（写真4参照）。石垣と校舎の間に池があった。校舎と石垣の間は2mか3mぐらい。石垣はほとんど全部がつぶれたので池は埋まった（図3参照）。（どんな揺れだったかおぼえていないかとの間に、）まともに歩けないような揺れだった。教室の中にいたが飛び上がるほどの揺れではなかった。（縦揺れよりも横揺れが卓越していたように思われる）。渡り廊下は旧校舎の2階と平屋の新校舎をつないでいた。渡り廊下は、したがって斜交い（はすかい）にかかっていたわけではない。（古い校舎の跡に立って、どの向きに揺れたかわかりますか？との間に、）。いやおぼえてない。新校舎の建物はあがあるがもう今は使っていない。ここの校舎を使って学校があったのは、昭和41年頃まで。学校の統廃合で移ることになった（松實氏の解説）。

地震ではないが、18歳の時、つまり昭和23年に大雨があつて道はとおらなかつた。天川から阪本へ出るとき通れなかつた。濁谷の辺りのことだったかも知れない。当時は山仕事、その後郵便局に勤めたりして、また土方仕事もした。今は仕事はしていない。



写真4 地震でこわれたという石垣のそばで

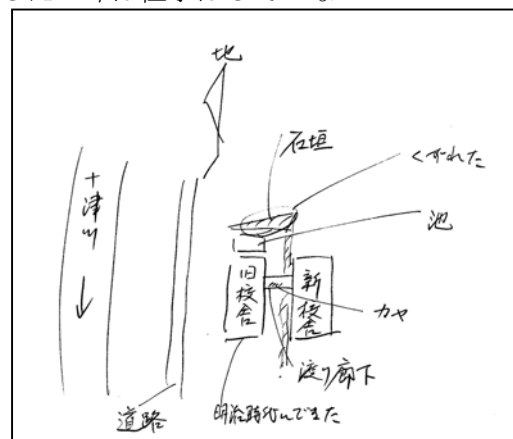


図3 旧上野地小学校敷地配置図

**6.7 大字東中の 入鹿 孝氏**（いるか、昭和5年生まれ）と**入鹿敏子氏**（昭和12年生。このあと、敏子氏は2004年に亡くなられた。ご冥福を心よりお祈りする）

**孝氏：** 当時私は中学校の2年生。十津川中学校のグラウンドにいた。現在の十津川高校。剣道の時間に地震が来たのでグラウンドに腰を下ろした。昭和19年の地震だ。十津川の対岸の崖の上の方から斜面が崩れて落ちるのを目撃した。建物は横揺れ。川沿いの校舎は東西に揺れたことになる。川の対岸は南。校舎のそばに池があったが水が波立って池の外へ水が溢れた。矩形の池の差し渡しは5mぐらいいはあった。深さは1m以上。地震の直後、十津川の水が細くなった。何でやろなと思っていると、暫くして増水した。濁っていたかどうかはおぼえていない。上流にある滝のところで崩壊があって流れが一時的にせき止められたせいだったようだ。崩落といえば、折立の直ぐ上流の今戸（イマド）の少し上で大きな石が落ちてきて河原をバウンドして水途（ミト）まで達していた。差し渡しは3m以上はあっただろう。印象深かったのは山が抜けてたくさんの大きな石が落ちて、そのうちの格別に大きい石は水途まで達したということだ。（水途＝“流れ”の意味。“筏”をやる人々が使う言葉）。場所は、森組の砂利とりのほうへ降りて行く道の近くだ。

**敏子氏：** 私はその頃まだ名古屋のほうやった。地震のときは名古屋のほうもひどかった。私は昭和20年になって疎開で十津川へやってきた。その前のことだ。一年生やったけどきつい揺れやったから地震をおぼえている。広場へ逃げた。広場では目の前で地割れができた。瑞穂区に住んでいた。あとのことになるが、名古屋も空襲で焼け野原になった。

**孝氏：** 昭和21年の地震はおぼえていない。昭和23年卒業まで十津川高校だったが、21年の地震はおぼえてない。昭和23年か25年の地震で石楠辺が大クエ（現在は国道425号線沿い）になった。石楠辺がこわれたのはやっぱり昭和23年のことだったと思う（敏子氏）。この地震のときは石垣にへばりついたのをおぼえている。昭和25年だったら私はもう中学校だから。

亀本さんが石楠辺にいたという話があったが、昭和21年の地震のときには石楠辺の大クエはまだ起こっていなかったのだろう。昭和21年の地震で石楠辺の大クエが起きたのなら、亀本氏がそのことに言及なさらないはずがない。石楠辺の大クエはやはり昭和23年に起きたのだろう。

崩壊の話題の中で、小学生が通学途中に崩壊に会い、遭難したことがあるとの話を伺う。昭和28年7月18日の大雨による大字東野（トウノ）の天狗倉での崩壊で、有蔵（あんぞう）の小学5年の女子児童が圧死したという。当時小学校は大字神下（コウカ）字下葛川にあり、山道の通学に片道3時間は要したとのことである（松實豊繁、2003；十津川村教育委員会、1998）

**孝氏と敏子氏：** 昭和19年の地震のとき東中では被害はなかった。揺れが小さかったのだろう。十津川のほうの石は黒いが、こちらの石は白っぽい。地震に強いのかも知れない。台風が来てもこの辺りは平気。台風の強風がやってこない場所です。だけど冬の季節風はきつい。**敏子氏：** 夏でも夜は涼しい。お盆の頃には、夜は寒いくらいのこともある。**孝氏：** 21年の地震の記憶ははっきりしない。その頃は剣道場の建物の一角が寄宿舎になっていて

そこに入っていた。戦時中は緊急時にはよくたたき起こされた。だけど地震の記憶はない。新宮で火事があったのはいつだったかな（孝氏）。あれは21年の地震です（松實氏）。最近、この近くにも地震計が設置されたりしている。孝氏と敏子氏：昭和19年の地震のことはよくおぼえているのに、21年の地震のことが記憶にないのは何故だろう。不思議だ。

**6.8 大字竹筒字葛山の 岡 嘉孝氏**（昭和15年生、嘉孝氏の母上は岡 恵ゑ（としえ、明治39年））と**松浦信福氏**（のぶよし、大正14年生）

**嘉孝氏：** 昭和19年20年頃には夜よく地震があった。昭和19年の地震ではないかと思う。家の外で遊んでいたらきつく揺れて、家のそばの石垣が崩れた。高さが1.5mほどの塀の石垣だ（写真5）。家は山谷方向（おおむね東西方向）に揺れたのをおぼえている。昭和19年には私は4才。地震で竈（カマド）が崩れたが、それは高さ1mほどのものだ。それは昭和19年の地震か21年の地震かはわからない。（昼間のことのようなので、昭和19年の地震ではないか）。お茶を炒ったりサツマイモをふかしたりするためのかまど。地震のとき、この斜面の下の方の松浦てい子さんがやってきたのをおぼえている。（ここで岡氏が松浦てい子氏の兄の松浦信福氏に電話をなされた。信福氏がご足労下さることになる）。竹筒ではこの近くに東 義久さんという方がおられる。私（岡氏）より6つ年上です。（東氏に電話なされたが、今日は新宮のほうに出かけておられて不在とのこと）。

**松浦信福氏：** 昭和19年の地震のときは呉に行っていてここに居なかった。うちの石垣も倒れた。昭和19年と21年のどちらの地震で倒れたのかは判らん。墓石が倒れたかも知れない。墓石が倒れたというのを聞いたのは昭和25年の地震かも知れない。地震の関係で印象に残っているのは新宮が燃えて煙が上がっていたのを見たことだ。昭和21年の地震のときには山の斜面の石がまくれて落ちていくときの音を聞いたのをおぼえている。

**岡氏：** そのときかな。近くの斜面の石がまくれて雑木に引っ掛かって浮いていたことがあった。その石は近くの斜面に埋めてもらった。（松浦氏： 埋めた埋めた、そういうことがあったなあ）。近くに崩れやすそうな斜面があるけれど地震のときに崩れたということとはなかったように思う。

**松浦氏：** 思い出した。玉置参詣道のここから少しあがった辺りに亀裂がいくつかはいていた。2～3箇所ほど。ここから数百m あがったところだ。亀裂が入って段差ができていた。木ノ本から九重（クジュウ）を通過して玉置山へ行く道だ。木ノ本街道とも、九重越えとも言う。段差ができたところは傾斜がきつかった。30°ほど。

**岡氏：** この上にうちの昔の屋敷があって、田圃が一枚あった。その上に湧き水の出るところがあった。参詣道は幅が1.5mほど。道普請をよくやったものだ。最近まで毎年7月頃に草刈りをやっていたが今はもうやめた。林道が参詣道を切ったので段差ができて通る人もなくなった。あの参詣道の辺りは村有林だ。

（明治の水害以降、この辺りでは大雨で災害となったなど、何かお聞かせいただけることはあるかとの間に、） **岡氏：** 2004年11号台風のときの雨がすごかった。増水したけれ

ど、水害にはならなかった。10号台風のときは11号のときより雨が少なくて川の水のにごりの程度も低かった。松浦氏：昭和28年、伊勢湾台風、13号台風（何年だったか判らないが）などのときの大雨もすごかったのをおぼえているが、この辺りでは、それで災害になったことは無い。松實氏：災害で被害があったら役場に届けているはずだが、村役場ではそのような資料を長くは保存するわけではない。いらなくなったらすぐに処理する。いちいち保存ししたら倉庫が足りなくなる。（注。10号台風は7月30日から8月1日にかけて、11号台風は8月3日から5日にかけて紀伊半島にも大雨をもたらしている。特に11号台風は北山川流域に記録的な大雨をもたらした。）



写真5 崩れた石垣の辺りを指し示す岡氏



写真6 植氏宅庭先の池の跡

#### 6.9 大字竹筒字上地（ウエジ）の 植 靖彦氏（大正元年生）

植氏：庭の池の水が揺れたのをおぼえているが、いつの地震のときかおぼえていない。子供の頃だったから、大正時代のことだろう（写真6）。戦争に行ってた。最初はフィリピンへ上陸、ジャバ島へ上陸、チモールにもいた。台湾から帰ってきた。いつ頃帰ってきたかおぼえていない。その頃の地震のことはおぼえていない。

#### 6.10 大字神下字田戸の 玉置巳季子氏（大正6年生）

地震は何回もあった。昭和19年の地震のときはコンクリートにひびが入った。地震は昼間だった。あのころは配給があって、サツマイモをたくさんもろた。干瓢かんぴょうにしたらいいいと言われて、くど（竈）に火をおこしてサツマイモを煮ていた。地震でくど（竈）の脚がこけてしもて（折れて）大変なことになった。子供が小さかったのでおぶって逃げようとした。この建物の1階が郵便局だったが、電報持ちさん（玉置益一（ますいち）氏）は大きな布団をかぶって逃げなされたのをおぼえている。地震による揺れはおんぼろバスがガタガタ道で揺れるときのような状態で、私は始めよう立たなんだ。店の中の売り物の石けんなんかが棚から落ちたりはしたが、家がひどく壊れるなどということはない。この昭



和 19 年の地震と、もう一つは関東大震災の地震のときの揺れをおぼえている。そのときは小学校の一年生だった。（関東大震災は大正 12 年 9 月 1 日 11 時 58 分に起きている。玉置氏は当時確かに小学 1 年生だったことが判る）。熊野川町の九重（クジュウ）に居ました。私は九重の出です。関東地震ではここらも揺れたんです。（気象庁の資料に依れば、関東地震のときの震度は、紀伊半島では 3、愛知県東部や大阪、京都、滋賀では震度 4 となっている。ちなみに昭和 19 年の東南海地震、21 年の南海地震のときは十津川村ではおおむね震度 5 となっている）。関東地震のときは、地震があつてその後キジが鳴くともう大丈夫だということになった。私の里ではキジがケンケンと鳴くともう大丈夫だと言われていた。地震が来たときは柱にしがみついたのをおぼえている。東京が燃えたとか、富士山が吹き飛んだとか情報や噂が飛び交った。けどこの年になるともう怖いものは何もなくなった。（先日、大雨があつたが、との間に、）

ここらも風と雨がひどかった。息子が避難してこいと言つてきたが、大丈夫だと言つて言うこと聞かなんだ。滞ホテルの奥さんも今は未亡人になつとるが、大丈夫かと声を掛け合つた。こないだの台風 11 号のときの大雨でホテルのそこは大変じゃつた。谷からの水が道路を川のようになつてホテルのほうへ流れて、階段を滝のように流れ落ちたんじゃ。



写真 7 奥の建物の 2 階が玉置氏の店舗。手前が現在の郵便局

（世間話のあと）

この建物は古い。下が郵便局、上が店というふうにしてきた。この建物は私が子供の頃に建つたのだと思う（写真 7）。昭和 21 年の地震でゆがんだし、コンクリートにもヒビが入つた。建物は建て直すのではなく、直さんでそのまま、あるいは手直しで切り抜けてきている。

松實氏： ここから景色を見ると集落がない。ここ田戸の集落はこの上、急斜面に広がっている。しかし最近は過疎化が著しい。空き家が目だつようになってしまった。

玉置氏： 嫁いできたときはびっくりした。当時は電気もなく、ランプだった。九重には電気があつた。この建物の前の道も牛が通る道で、雨が降るとひどいぬかるみ状態だった。当時は靴もなく、みんな下駄で、背中まで牛の糞のまざつた泥はねだった。あきちゃ

んらは学校まで毎日歩いた。7 km 以上あるんじゃないかな（松實氏による）。木馬道（きうまみち）なんです。ようこけてきたわ。昔の子はみんなよう辛抱したわ。朝暗いうちに出て、冬なんか帰ってきたら暗くなっている。うちの倬（ご子息の名前）は残されて、帰りが遅れたため先生が電池（懐中電灯のこと）を貸してくれて、電池つけて帰ってくることもあった。それで、翌日は家から電池を持って学校へ向かわすこともあった。

（その後子供の話や世間話など、なかなか内容のある話が続く）

（そのほか地震や大雨でこの辺りが被った被害などは無かったか、との間に）

伊勢湾台風やその他台風が来る度に大雨はあった。この建物の前が川になるようなこともあった。（松實氏：ここは玉置山の南東斜面にあたるので、雨が特にたくさん降る場所です）

（玉置益一氏が大きな布団をかぶって、それを引きずるようにして逃げ出たという話に戻って、防空頭巾のことに言及することになったとき、玉置氏がビロードで作った防空頭巾を去年処分したという話をなさった。松實氏は、「それは残念。ほしかった」と仰った。十津川村に教育資料館というのを作られたそうで、防空頭巾は揃えたい資料の一つだそうだ。戦時中の話など、世間話がさらに続いた）

## 引用文献

国会資料編纂会（1998）日本の自然災害，637 p．

十津川村教育委員会（1998）中学校教育 50 年史「あゆみ」，101p．

十津川村（2001）年表十津川 100 年（改訂版），56p．

松實豊繁（2003）著者への私信．